

令和七年度

第十一回平和作文コンクール 作品集

先の大戦で多くの尊い命が犠牲になりました。この歴史的事実を風化させることなく、次の世代に正しく継承していくために、町内の小学五・六年生、中学生を対象に戦争と平和について考え、平和を尊ぶ心の育成の機会として、平和に関する作文コンクールを実施しました。

さつま町ほけん福祉課

最優秀賞

曾祖父と曾祖母のおかげで……………盈進小学校 六年 草野 紗良

//

平和な世界を願って……………宮之城中学校 三年 東 里依音

優秀賞

心から笑って……………鶴田小学校 六年 島崎 百那

//

平和な世の中にするために……………山崎小学校 六年 志鹿 翔太

//

整理しきれない戦争……………薩摩小学校 五年 段 心優人

//

絶対に忘れない……………柏原小学校 五年 朝倉 心愛

//

小さな平和から始めよう……………佐志小学校 五年 下屋敷 萌愛

//

平和な世界を作るために……………宮之城中学校 二年 東 杏樹

//

「沖縄戦を知って平和の意味を考える旅」

宮之城中学校 一年 市園 来真

【最優秀賞】

曾祖父と曾祖母のおかげで

盈進小学校 六年 草野 紗良

「この人たちが誰なのかも分からない。」
と、兵隊姿の曾祖父たちの写真を見て、みんなが言った。

七月二十日、曾祖母の法事があった。たくさん
さんの親戚たちが集まって、久しぶりの再会
に笑い声で包まれる、にぎやかな時間だった。

食事を終え、みんなで昔の曾祖母との思い出
の写真を見ていた。すると、一冊のアルバ
ムが私の目を引いた。そこには、若い頃の曾
祖父が映っていた。兵隊として戦争に行く前
に撮られた写真だった。白黒写真で、キリッ
とした表情の曾祖父。母たちは、

「じいちゃんはイケメンだよね。」

と言った。私にもかっこよく見えた。

アルバムには、他にも見たことのない兵士

が何人も写っていた。祖母たちも、

「この人達が誰なのかも分からないの。」

と話してくれた。母の話によると、曾祖父は、
「家族がいない中で育った。親や兄弟もい
なかったから、どうなってもいいと思って十
六才で志願したんだ。」

と、よく話していたそうだ。私には、十七
才の兄がいる。もし、兄が

「戦争に行く。」

と言ったら、心配で、怖くて、私は全力で止
めると思う。でも、戦争があった頃は、行く
のが当たり前だったというが、戦争のことを
勉強しても、曾祖父の話を聞いても、やっぱ
りどこか遠い世界の話のように感じてしまう。

写真に写る兵士が誰なのかも、名前も何も
分からないけれど、きっとそれぞれに家族や
大切な人がいたのではないかと思う。「お国の
ために」という言葉を胸に覚悟をもって行っ

てくれたのだと思うと、写真の中の人達が知らない人ではなく、私にとって大切な存在に思えてきた。

曾祖父は恐ろしい苦しい戦争を経験したが、無事に帰ってくる事ができたそうだ。そのおかげで、曾祖母と出会い、今の家族があるのだと思うと、命の大切さも改めて感じる事ができた。

曾祖母からは、詳しい話やどんな経験をしたのか、曾祖父の家族も、親戚達もみんなあまり聞いていない。もしかすると口にもできないほどの体験だったのかもしれないと思った。

今年は、戦後八十年の節目の年。テレビや新聞でもたくさん目にする事があった。しかし、戦争を体験した人たちが高齢になり、少なくなってきたいるそうだ。私たちは、戦争の恐ろしさをよく聞き、この目で見て、し

っかりと受け止めるべきだと思った。戦争は絶対にしてはいけない。曾祖父が戦争から帰ってきたのは、きっと私たちに繋げてくれたのだと思う。だからこそ、戦争があったことを忘れず、私も次の世代に繋げていきたい。

【最優秀賞】

平和な世界を願って

宮之城中学校 三年 東 里依音

私は、「平和」について考えるとき、当たり前の生活をできることがどれほど尊く価値のあるものなのかということに気づかされる。

毎朝目を覚ますと制服を着て学校へ行き、友達とたわいもない話をして笑い合い、日が暮れると、家に帰り家族と食卓を囲み食事を楽しむ。そんな何気ない日常の一つ一つが「平和」のピースになっている。けれど、それを当たり前だと思い込んだ途端に平和はだんだん遠のいていく気がする。

この「平和」のピースが一瞬にして破壊されてしまい、人々の命と希望が奪われる。それが「戦争」だ。

多くの人が「平和」という言葉を聞くと、まず戦争と結び付け、戦争がない状態が平和

だと思えるのではないかと思う。しかし、戦争が行われていなければ平和である。本当にそう言い切れるだろうか。

平和とは、単に戦争がない状態ではない。人間同士が互いに尊重しあい、信頼しあい、協力しあい、励ましあって生きる。こういう人間の状態、姿勢を指すのではないかと私は思う。

世界に目を向けると今、現在も児童虐待、いじめ、差別、殺人、貧困などの様々な「見えない戦争」が起きている。領土、環境、経済崩壊、宗教対立……。理由は色々と挙げられるが、これらの出来事の深層的な要因は、人々が自分の損得を真っ先に考えて、物事をふるいにかけて、そのうえで自身にとっての利益、幸せを優先するという現状があるからではないだろうか。

去年、私は修学旅行で広島市の平和記念資料

館を訪れた。そこで見た衝撃的な光景は目に焼き付き離れず、今でも鮮明に覚えている。

戦争により焼きただれた皮膚、少女の焼き焦げた弁当箱や焼けてボロボロになった制服、溶けたガラス瓶や陶器などのことばでは言い表しきれないものの数々。それら一つ一つが原爆がもたらした想像を絶する苦しみと悲劇、人間一人一人の命の重みを物語っていた。

展示品を目のあたりにして、胸が締め付けられる思いがし、平和の尊さ、命の重みを改めて深く実感した。また、日常の中に突如として訪れた悲劇、そしてそれに巻き込まれてしまった無数の命。意志ある展示品一つ一つから二度とこのようなことを繰り返してはいけないと強く伝わってきた。

私たちが今こうして平和な暮らしを送れることは、過去に多くの人たちが乗り越えてきた困難や努力の上に成り立っている。だから

こそ、今を生きる私たちにも戦争は深く関係がある。「過去のこと」だと思っていけない。

「平和」はただ願い、待っていれば訪れるものではなく、多くの犠牲と困難、努力と忍耐の果てによりやく築かれるものである。今の私たちがその恩恵を受けている以上、過去を風化させることなく、戦争について学び、知り、理解する。そして次の世代へとこの真実を語り継いでいく責任があるのでないだろうか。

人間同士が互いに認め合い、尊重しあう、相手のことを思いやる、過去の経験を歴史としてではなく一つの記憶として伝えていく。こういうことが平和な世界への第一歩になると私は思う。

平和を守ることも次の世代に伝えることもほかでもない私たち一人一人の「行動」にかかっている。だからこそ、私たち自身が言葉

だけでなく、実際に行動に移すことが大切だ。

「たかが一人。」私一人が行動しても大して何も変わらない。と思うかもしれない。けれど「されど一人。」このような一人一人の小さな努力、行動が積み重なって平和な世界が訪れる。小さなことからでも、始めてみようとすることに意味、価値があるのではないだろうか。

私たちは、これからの未来を担う存在だ。だからこそ、「平和な世界」を守る努力をしなければならぬ。たとえ、それが一人の努力であっても、その行動はいつか必ず誰かの心を動かし、人から人へと影響を与え続けていく。そしてそれは平和を作る大きな力となり、世界を変えていく原動力になると思う。

「平和な世界が訪れますように。」

この願いが、私たち一人一人の行動や努力によって叶う日が来ることを信じて、私はこ

れからの未来を歩み続けたい。

【優秀賞】

心から笑って

鶴田小学校 六年 島崎 百那

白黒の写真には、若い男性たちが子犬を抱きながら笑顔で写っていた。「これは何だろう。」私はそう思って、母に聞いてみた。すると母は、

「これは、特攻隊員の本だよ。この人達はみんな今から戦争に行く人たちだよ。」

と、教えてくれた。私は、それを聞いて、とても驚いた。「どうして、今から戦争に行くのに笑っているのだろう。」と。私は、ページをめくってみた。すると、たくさんの写真が載っていて、どの写真もこれが最後とは思えないくらい笑っていた。私は、特攻について詳しく知りたくなった。本を読み進めていくうちに、知覧特攻平和会館という施設があることを知り、行ってみることにした。

中に入って、すぐに私は息をのんだ。なぜなら、そこには若い男の人たちの写真がたくさん飾ってあったからだ。私は、恐る恐る母に聞いてみた。

「この人達、みんな亡くなったの。」

母は、悲しそうな表情で頷いた。「こんなにたくさんの方が亡くしなければならなかったのか。」私は、胸が張り裂けそうになった。それから、一人一人の写真を見ていった。特攻隊員の人たちの中には、一六歳や一七歳の人もいた。私は、ふと横にいる兄を見た。私の兄は十五歳。この時代だったら、あと一年で特攻隊員になっていたかもしれない。その時、兄はどんな想いで旅立っただろう。そして、私はどんな想いで兄を見送り、どんな言葉かけただろう。考えると、自然と涙がこぼれた。その後、私は特攻隊員が家族や恋人にあてた手紙や遺書を読んだ。そこには、今まで

の感謝の気持ちや自分がなくなった後の氣遣いが書かれていた。死を前にして恐怖や悲しみでいっぱいはずなのに、家族や恋人を心配して、励ます文に私は胸を打たれた。決して自ら望んで特攻するわけではなく本当は死にたくないのに、その気持ちに蓋をする。そんなことは私にはできない。あの子犬の写真の人たちも本当の気持ちに蓋をしながら笑っていたのかと思うと心が苦しくなった。

今、私は当たり前のように家族や友人に囲まれて笑って過ごしている。でも、これは当たり前ではなく、幸せな事なのだ。戦争は悲しみしか生み出さない。もう二度としてはならない。家に帰って、あの写真をもう一度見たとき、私は強くそう思った。

争いがなくなることは簡単ではない。しかし、一人一人がこの悲惨な出来事を知り考えることで、平和に一步近づくはずだ。そのた

めには、これから平和について考え、自分が学んだことや気持ちを次の世代に伝えていかなければいけない。一日でも早く戦争のない世界になり、世界中の人が心から笑って暮らすことができるようになってほしい。私はそう願う。

【優秀賞】

平和な世の中にするために

山崎小学校 六年 志鹿 翔太

「周りの人達のために、ほんの少し行動することが、いずれ世界の平和につながるのではないでしょうか。」

この言葉は、広島市の小学六年生が平和の誓いとしてスピーチしていた言葉だ。八月六日、テレビで広島の平和記念式典の様子が放送されていた。僕と同じ小学六年生が平和について、真剣に考え、世界の人々に訴えかけている映像を見て、僕はハッとした。僕は、平和についてどれぐらい考えているだろうか。学校で、「今年は戦後八十年の年」ということを学んだ。僕にできる「平和につながる活動」ってなんだろう。

僕がまだ幼い頃、ひいおじいさんが戦争のことについて話しているのを思い出した。ひ

いおじいさんは、戦争を体験していた。戦争中は食べる物や着る物も満足になく、とても苦しい生活だったそうだ。その話の中で、僕の心に強く残っているのは、ひいおじいさんの友達や知り合いの人についての話だ。話によると、ひいおじいさんの友達や知り合いの人の中にも、戦争によって命を落とした人があるということだった。僕は、この話を思い出し、自分の立場で考えてみた。きっと複雑な思いになると思う。自分の友達をなくしてしまったという悲しい気持ちはもちろんある。それと同時に、自分の友達の命を奪った人に対する怒りがわいてくるに違いない。想像するだけでも自分が怖くなった。そんな自分は嫌いだ。

朝起きてご飯を食べて、学校に行き、勉強する。学校から帰って来たら、おやつを食べ、宿題をし、テレビを見た後に夕食を食べ

る。そして、お風呂に入って寝る。こんな毎日を過ごしている僕が、ひいおじいさんはどんな時代に生きていたのかについて、僕なりに考えようとしたけれど、今、僕が生きている世の中とあまりに違いすぎていて、正直よく分からなかった。でも、きっと僕が考える言葉以上の恐怖や苦しさ、寂しさを感じていたに違いない。今の豊かな生活は当たり前ではないんだということを改めて感じた。

僕が、平和のためにできることは何だろうか。二つ考えた。一つ目は、自分にできる小さなことを続けることだ。例えば、友達への優しい言葉かけ、困っている人に対する手助け、学校のボランティア活動などだ。

もう一つある。それは、僕のひいおじいさんのことを忘れないことだ。僕のひいおじいさんも、亡くなってしまった。戦争を体験した方から話を聞くことができるのも、近い将

来なくなるだろう。今はいないひいおじいさんのことばのおかげで、平和について考えることができた。だからこそ、僕のひいおじいさんのことを忘れず、他の人にも伝えていくことが、今の平和な日本を守っていくために、僕ができることだ。

【優秀賞】

整理しきれない戦争

薩摩小学校 五年 段 心優人

「ちょっと、私はここまでにする。」

と、姉が言って外へ出て行きました。原爆資料館の展示物を見ているうちに具合が悪くなって、その場にいらなくなってしまったのです。僕も、いっぱいいいっぱいになりながら、この展示だけは見ておかなければならないという気持ちで、目に焼き付けていきました。

八月十五日、僕たち家族は長崎原爆資料館にいました。入口のところに十一時二分で止まった時計があり、「長崎を最後の被爆地に」と書いてありました。十一時二分は原爆の落ちた時間です。

ガイドのおばちゃんと中学二年生が丁寧に説明をしてくださいました。時計が熱で曲がっていて、時計の振り子も取れていました。

ものすごい熱の波が襲ってきたそうです。大きなアイロンが追ってくるような感じで、大きなクレーンもぐにやぐにやになっていました。「鉄がぐにやぐにやになるんだから、人間なんてひとたまりもない。」と思いました。

一番びっくりしたのは、原爆の模型です。長さが三メートル以上あり、放射能が中に詰め込まれていました。地上六百メートルで爆発したそうです。大きなきのこ雲とともに、アイロンのような熱の波、そして、放射能があたりを襲ったのです。

「なぜ、こんなことをしたんだ。」

僕は、どうしても理解ができませんでした。

この感情は、二年前に知覧の特攻平和会館に初めて行った時の感情と似ています。目で見ただけで、心で整理していくことができません。日本軍は、どんどん追い詰められて、飛行機ごと体当たりをする特攻隊

で反撃しました。知覧で聞いた時は、なぜそんなことをするのか訳が分かりませんでした。アメリカ軍は、原爆のために三機でやって来たそうです。原爆を落とす係と、落とした原爆を記録する係です。心がざわざわしました。

「最初は小倉に落とそうとしたけれど、天気が悪くて、長崎に落としました。原子爆弾が落ちた後は、すべて焼き焦げて黒くなった死体がたくさん転がっていました。」

と、ガイドの方が教えてくださいました。

「原爆を落とすなんて理解できない。」
と、思わずつぶやいてしまいました。

今、平和な日本です。でも、戦争をしている国もあります。いつ、戦争が起きてもおかしくないという気がします。八月十五日は、僕の心の中が戦争でいっぱいになりました。もう一度心の

中を整理して、戦争をしないために出来ることを考えようと思います。

まず、自分の学級や学校で出来ることを考え、世界のニュースにも目を向けます。

【優秀賞】

絶対に忘れない

柏原小学校 五年 朝倉 心愛

戦争は絶対にしてはいけない。そう強く思った。今年の八月十五日で終戦から八十年を迎えた。しかし、今でも戦争をしている国もある。戦争が起こった八十年前には、まだ私も生まれていない。だから私には、本当の戦争の恐ろしさや怖さは分からない。でも、分からない、知らないではなく、知ろうとすることが大切だと思った。戦争を経験した方々も高齢になり、戦争を語り継ぐ人々が減り、戦争をしてしまいそうだと不安になることもある。そこで私は、何か出来ることはないかと考え、まず祖母に話を聞いてみることにした。

祖母は、

「たくさんの方の命が奪われる、とても悲し

いものだった。」

と言った。その祖母の言葉が、心にゆっくりゆっくり入ってきたような気がした。

夏休み前の全校朝会で、戦争の話を聞いた。私が住んでいるさつま町にも小型機が飛んできて亡くなった人がいることを知った。何もしていないのに、どうして命が奪われるのだろうと思った。また、戦時中は、生活が貧しくお腹いっぱい食べることが出来なかったそう。うだ。先生が、

「おかゆの中に米粒が三十粒しか入ってなかったのだよ。」

と言って、実際に米粒三十粒を入れた袋を見せてくれた。想像していたよりも少なくともとても驚いた。

私はある新聞記事で、資料館と図書館に戦争当時の記憶を今に伝える資料が展示してあることを知った。戦う人が着ていた服、亡く

なった人の写真など多くの資料が展示されている。見るだけで心がとても痛くなった。

私に今できること。それは、自分が戦争について勉強をして、二度と戦争をしてはいけないということを多くの人に伝えることだと思う。毎日、安心して生活できることに感謝をしないといけないと思う。私は、学校や習い事に行くことが、毎日楽しいわけではなく、体がきついと感ずることもある。しかし、学校で友達や先生たちと楽しく勉強が出来ること、運動が出来ること。家でお風呂に入ったりお腹いっぱいご飯が食べられたりすること。習い事のサッカーで思いきりボールを蹴ることが出来ること。すべて当たり前ではないことに気付かされた。今でも戦争をしている国では、体に大きなけがをしたり、命を落としたりする人がいる。また、学校に行きたくてもいけない子供もいる。たくさんの人を傷つ

ける戦争は絶対にしてはいけない。

これからたくさんの人に戦争はしてはいけないということを自分の言葉で伝えていきたい。自分の国のためにと戦っていた人達がいること。命を奪われた人達がいること。絶対に忘れてはいけない。

【優秀賞】

小さな平和から始めよう

佐志小学校 五年 下屋敷 萌愛

「見つかるから早く家に帰れ。」

幼い頃、赤い服を着ていたひいおばあちゃんは、近所の人にそう言われたという。戦争の話をはひいおばあちゃんから聞いて、私はとても驚いた。約八十年前の太平洋戦争を、ひいおばあちゃんは実際に経験したのだ。空襲が来るかもしれないと、隣の家との間の木陰で慌てて作った味のしないおにぎりを食べたこと。好きな服でさえ命を危険にさらすこと。ひいおばあちゃんの日常は、私には想像もつかないほど危険と隣り合わせだった。

四年生のとき、戦争を体験した方からお話を聞く機会があった。その方は、種子島から学童疎開で私の住むさつま町に来て、本当の家族のように育ててもらったそうだ。戦争が

終わって別れるとき、泣いて抱きしめ合ったという。その後も交流が続き、さつま町の人々が新聞に載るとお手紙を送っているそうだ。私も、新聞に作文が載ったとき、その方からお手紙をいただいた。今もなお、自分の体験を語り、次の世代に伝えようとしてくれていることに深い思いを感じた。

戦争のことをもっと知らなくてはと思った私は、知覧に行った。特攻基地となった知覧飛行場から、多くの若い命が沖繩へ向けて飛び立った。今の平和な暮らしのために、彼らは命を懸けて戦ったのだ。自由に生きることが出来なかった時代があったからこそ、今の自分がある。だから私は、贅沢や不満ばかりを口にするのではなく、与えられた生活に感謝し、自分に生きられなかった人たちの分まで、たくさんを経験をして生きていきたいと思う。

平和のために私たちが出来ることは、まず身近なところから始めることだ。相手の気持ちを考え、よく話し合い、互いを大切にすれば、小さな争いは減っていくはずだ。そして何よりも大切なのは、戦争があったこと、そのことで生きた人たちの思いを忘れずに、次の世代へ語り継ぐことだ。体験者のように語ることは出来なくても、聞いた話や見たものを、自分の言葉で伝えることは出来る。

戦争の過去を知り、「戦争は二度とあってはならない」という強い意志を持つこと。そして、今も世界で戦争や貧困に苦しむ人がいることを知り、私たちに出来ることを考え続けること。それが平和への一歩だと思う。子供の私たちには大きなことは出来なくても、募金活動に参加したり、友達と平和について語り合ったりすることは出来る。大切なのは「互いを大事にしよう」という気持ちだ。この思

いがあれば、小さな平和が生まれ、それが大きな平和に繋がっていくのだと思う。戦争という辛い経験をした人達の思いを胸に、私は毎日を大切に、感謝して生きていきたい。過去の悲しみや痛みを忘れることなく、平和の尊さを伝え続けること。それによって、戦争という過ちが二度と繰り返されない未来を、私たちが自身の手で築いていきたい。

【優秀賞】

平和な世界を作るために

宮之城中学校 二年 東 杏樹

今日、ニュースや新聞記事では戦争や紛争についての話がよく取り上げられる。そのたびに平和ってなんだろう？なぜ戦争はなくならないのだろう？といった疑問がいくつも底知れず湧き出てくる。私は自分なりに、平和について考えてみることにした。

「平和」この言葉を聞いて最初に思い浮かぶのは戦争だ。戦争と平和。この言葉同士の関係は切っても切り離せない。多くの人達が戦争がない状態が平和だと考えるのではないだろうか。しかし、本当にそうなのだろうか。私はそうは思わない。世界では、戦争以外にもたくさんの深刻な問題を抱えている。この世界が抱える問題を解決するのが平和になっているのではないか。現在ウクライナとロシア

による戦争やイラン・イラク戦争また、イラン・イスラエル紛争など世界各地で戦争や紛争が続いている。今、この瞬間も世界では安心して寝ることさえもできず、十分なご飯を食べることもできず、飢えてなくなる人達が安心して当たり前の生活を送ることが出来るということが平和に繋がるのではないか。

祖母から、広島原爆ドームはとても悲惨で衝撃的な姿だったという話を聞いた。そう話す祖母の顔は、今までに見たことのないほど辛そうで、重苦しい雰囲気をもっていた。この姿を見てこの世の中は、なんて不条理なんだ、なぜこんなになるまで戦争を続けたのだろう、と複雑な思いが込み上げてきた。戦争は何の罪のない人たちが犠牲になり、たくさんの方が破壊される。その数は計り知れない。戦争をする理由は、複雑で色々なことが絡み合って起こるのかもしれない。けれど、

どんな理由があっても絶対にしてはいけないのだと私は思う。

平和な世界を作るためには相手の気持ちを考えることが大切だと思う。自分のことだけを考えず、相手のことを考えることが出来るのなら、戦争や紛争などは絶対に起こることはないと思うからだ。私たちは、平和な世界に暮らしているからこそ戦争や紛争の話を聞くとどこか遠くに感じ、他人事のように思ってしまうけれど、私たちの住んでいる日本では実際、戦争が起きているから決して他人事じゃないし、そう思っではいけない。私は、世界中の一人一人が安全に安心して暮らすことが出来るこそが平和なのだと思う。

私たちは、日本という平和な国に暮らしているからこそ当たり前のことを当たり前に出ることがどれほど尊く、価値のあるものなのか見失ってしまう。この悲惨な経験を今世

へと伝えていかなければならない。私たちは、唯一の被爆国として世界の国々に戦争の悲惨さや平和の尊さを伝えていこうと思う。また、この経験が忘れられていくということはあってはならない。そのために一人一人が戦争について分かり合い、伝えていくということが大切だと思う。私は、これから戦争についての知識を身につけ、少しでも多くの人達にこの戦争の話を知ってもらいたい。そして、今苦しんでいる人達に少しでも多く笑顔を増やしてほしい。

「これから先、平和な世界が訪れますように。」

【優秀賞】

「沖縄戦を知って、平和の意味を考える旅」

宮之城中学校 一年 市園 来真

私は、去年の秋、家族旅行で沖縄を訪れました。海がきれいで、自然が豊かで、人も優しくとても素敵な場所でした。しかし、その美しい沖縄には、深い悲しみの歴史があることを、私は「沖縄県平和祈念資料館」を訪れて初めて本当の意味で知りました。

資料館に入るとそこはまるで時間が止まったような静けさに包まれていました。壁一面に飾られた写真や展示物からは、沖縄戦で人々が体験した恐ろしい現実が生々しく伝わってきました。焼け焦げた衣服、壊れたおもちゃ、小さな子供が書いた日記、それら一つ一つが、どれほど残酷で、どれほど多くの命を奪ったのかを教えてくれているようでした。ガマ（自然の洞窟）に隠れていた人達の話も

私の心に強く残りました。沖縄の人々は、空襲や戦闘から逃れるためにガマに避難していましたが、そこには電気も水もなく、暗くてジメジメしていて、息をひそめながら何日も過ごさなければなりませんでした。資料館の映像コーナーで当時を語るおばあさんの話を聞き、「ガマの中で赤ちゃんが泣くと、敵に見つかってしまうから、母親は必死で泣き声を止めた。」という場面に、私は思わず涙がこぼれました。戦争はそんな小さな命さえも危険にさらすのです。さらに私が衝撃を受けたのは「集団自決」と呼ばれる出来事でした。「敵に捕まるよりは死んだ方が良い」と信じこまされ、家族同士で命を絶った人たちがいたという事実には、私は言葉を失いました。本来、私たちにとって命は何よりも大切なはずですが、それなのに、戦争はその命を自分の手で終わらせなければならぬほどの苦しみを人々に

与えるのです。資料館の出口には、「平和の礎（いしじ）」という石碑がありました。そこには、沖縄戦で亡くなったすべての人々の名前が、国籍を問わず刻まれています。日本人もアメリカ人も、兵士も民間人も、すべて同じように一つの石碑に名前がありました。その姿に、命の重さに違いはないという強いメッセージを感じました。沖縄戦を体験した方々の言葉も紹介されていました。「戦争は二度といけない。」「平和は当たり前じゃない。」「そんな言葉を、涙を浮かべながら語っていた方の表情が、今も忘れられません。私はそれまで、戦争は昔の話で、自分には関係のないもののように思っていました。でも、この旅を通して、戦争は決して過去のことではなく、今の平和の上に成り立っている「重い事実」なのだと感じかされました。私たちは、もう戦争を体験した人の声を聞く機会が少なくなっ

きています。だからこそ、実際に資料館を訪れ、自分の目で見て、自分の心で感じる事がとても大切だと思います。教科書だけでは分からない現実が、沖縄にはありました。沖縄戦では、およそ二十万人以上が命を失いました。戦争は人と人が殺し合い、心を壊し、たくさん悲しみを生み出すものです。そして、今の平和がどれほど大切でありがたいものなのかを実感しました。

私たちに出来ることは何でしょうか。それは、戦争の歴史を知り、語り継ぎ、平和の大切さを忘れないことです。学校で学んだこと、資料館で見たこと、体験したことを家族や友人に話すだけでも、それは大切な一歩だと思います。そして、いじめや差別をなくし、小さな優しさを大切にしていくことも、平和に繋がると思います。沖縄戦を学んだことで、私は命の大切さと平和の尊さを知りました。

これから、この気持ちを忘れず、私なりの平和のための行動を続けていきたいです。戦争で亡くなった人たちのためにも、今を生きる私たちが戦争のない未来をつくっていく責任があると感じています。「平和」は当たり前ではなく、多くの犠牲の上にあるということ、私は心に刻んで生きていきたいです。